HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	SukhāvatīvyūhaとPāli聖典
Author(s)	藤田, 宏達
Citation	北海道大學文學部紀要, 18(1), 1-45
Issue Date	1970-03-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33340
Type	bulletin (article)
File Information	18(1)_PL1-45.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

Sukhāvatīvyūha と Pāli 聖典

藤　田　宏　達

Sukhāvatīvyūha と Pāli 聖典

藤　田　宏　達

はしがき

Sukhāvatīvyūha と呼ばれる Sanskrit (Skt.) 経典は，周知のように大小二経，すなわち F. Max Müller の命名によると，*The Larger Sukhāvatīvyūha* (*Sukh*) と *The Smaller Sukhāvatīvyūha* (*Sm. Sukh*) の二種があるが[1]，ともに浄土教の根本経典であり，その原初形態は大乗仏教の初期時代に成立したもので，およそ西紀100年ころ，北西インドにおいて編纂されたと推定される[2]。現存の *Sukh* は，14,5世紀以降のネパール写本にもとづき，また *Sm. Sukh* は9世紀ごろ日本に伝来した悉曇本にもとづいて出版されたものであるが，F. Edgerton によって，Buddhist Hybrid Sanskrit (BHS) と名づけられたところの Skt. で書かれている点で，言語的に他の Skt. 仏典の大部分と共通の性格を示している（*Sukh* は BHS の第二段階に属する作品と見なされている[3]）。ところで，BHS がどのような Prākrit を基礎にして成立したかということは，今日なお十分に明らかにされてはいないが，しかし，現存の Prākrit の代表的言語である Pāli 語と対比されるべき要素を最も多く持っていることについては異論がない。その意味では，*Sukh* 及び *Sm. Sukh* も当然 Pāli 聖典と対応関係を持っていることが想定されるが，ただこれまでには，その具体的な関係についてまとまった研究が行なわれたことはない。もちろん，BHS 全般については，Edgerton による文法・語彙の集大成があり，その成果は *Sukh* 及び *Sm. Sukh* に対してもほぼ適用されうるものであるが，しかしそこでは，BHS にしばしば認められる特徴的な文体

論についての考察は必ずしも十分にはなされていない[4]。一方，仏典の慣用語句を集める試みは，古くは *Mvy* 6262–7696 に見られ，最近では É. Lamotte が羅什訳の『維摩詰所説経』や『首楞厳三昧経』のフランス語訳に当たって，BHS に認められる formule や cliché を集めているし[5]，また N. Dutt のごとく *Saddharmapuṇḍarīka* (*SP*) に認められる慣用句の幾つかを Pāli と対比する試みも行なわれているが[6]，しかしいずれも未だ概括的もしくは部分的研究にとどまっており，特に本課題の *Sukh* 及び *Sm. Sukh* に関説するところは殆んどない。そこで，本稿では *Sukh* 及び *Sm. Sukh* に表われる BHS 特有の phraseology の中で，特に Pāli 聖典と parallel な箇所を取出して，両者を比較考察してみることにしたいと思う。これは，*Sukh* 及び *Sm. Sukh* において，時として認められる不明もしくは難解な語句を解読するに役立つばかりでなく，さらに *Sukh* 及び *Sm. Sukh* が原始仏教聖典とどの程度のつながりを持っものであるかということを明らかにするであろう。もとより，*Sukh* 及び *Sm. Sukh* の編纂者たちが知っていたと推定される原始仏教聖典は，恐らく北伝系の部派所伝のものであって，南伝上座部の Pāli 聖典ではないけれども，今日としては，言語的には Pāli 聖典を通して見ることによって，最もよく原始仏教聖典との関係を究明することができると言えるからである。

以上の観点から，本稿では *Sukh* 及び *Sm. Sukh* の中より，注目すべき用例を 33 項取出して比較考察するが，このうち **1)** と **33)** は両経に共通した用例，**2)**～**29)** は *Sukh* に主として見られる用例，**30)**～**32)** は *Sm. Sukh* に主として見られる用例である。一々の項下では，まず Skt. 文と Pāli 文とを対比し（その邦訳は紙数の都合で省略），つぎに必要な解説を附すことにする。ここに挙げられる用例は，原則として特徴的な phrase もしくは cliché に限るもので，BHS の語彙や，ありふれたもしくは簡単な語法を含んではいない。それらは，Skt. 文にしても Pāli 文にしても，ともに同じ仏典である限り，共通性を持

つのはむしろ当然と考えられるからである。

Skt. 文のテキストについては，*Sukh* は足利本[7] を主とし，かねて Oxford 本を荻原改訂本(W)[8] の頁数によって示し，校異は大谷本[9] も参照した。そして，必要に応じて，これまでに入手し得た次の写本の複写を参看した[10]。

Bib. 本 …… パリ Bibliothèque Nationale 所蔵写本 (Collection Hodgson-Burnouf, Nº 153＝Ancienne cote, Burnouf 85)

Bir 本 …… カトマンドゥ Bir Library 所蔵写本 (te 594/2 ＝ Catalogue No. 248(b))

Cal. 本 …… カルカッタ Asiatic Society 所蔵写本 (No. B, 20)

東大本 Nos, 27, 〔40〕, 43, 63, 393, 399 …… 東京大学図書館所蔵写本 (Cat. Nos. 〔467〕, 468, 469, 470, 471, 472)

京大本 …… 京都大学図書館所蔵写本

次に，*Sm. Sukh* は Oxford 本を荻原改訂本[11]の頁数によって依用し，校異には石山寺所蔵本を足利校訂本[12]によって参照し，かつ他の悉曇本[13]も必要に応じて参看した。また，木村本[14]は未完本ではあるけれども，該当箇所のあるところは参照した。

なお，Pāli 文については，原則として PTS 版にもとづき，必要な場合シャム版を用いた。また BHS に属する諸文献は，*Sukh* と *Sm. Sukh* 及び若干のテキストを除いては，大体は Edgerton の *BHSG &D* に用いられているテキストを使い，その Abbreviations に従っている。

比 較 考 察

1)(A) evaṃ mayā śrutam ekasmin samaye bhagavān Rājagṛhe viharati sma Gṛdhrakūṭe parvate mahatā bhikṣusaṃghena sārdhaṃ dvātriṃśatā bhikṣusahasraiḥ sarvair arhadbhiḥ kṣīṇāsravair niḥkleśair uṣitavadbhiḥ samyagājñāsuvimuktacittaiḥ parikṣīṇabha-

下の 19 語) は，*AsP* 3.14–17 や *SP* 1.6–9 などの初期大乗経典にも類似の文が見られるもので (cf. *Mvy* 1075–1088)，その由来を原始経典に求めうることは，上掲 Pāli 文 (b) がこれと表現的に類同していることによって裏づけられる (Pāli 文の katakaraṇīyo ohitabhāro に対同する語は *Sukh* にはないが，*AsP* や *SP* などの定型文にはある)。もっとも，*Sukh* には上掲 Pāli 文には説かれていない表現も数多く見出されるが，しかしそれらの一々についてみると，すべて何らかの点で対同する Pāli 語が存する。すなわち次のごとくである。

niḥkleśa …… nikkilesa (*MNd* 340; Siamese *CNd* 49, 69)

vijitavat …… vijita, vijitāvin (*MN* II. 131, 134, etc.)

uttamadamaśamathaprāpta …… uttamadamathasamatham anuppatta- (*AN* II. 38)

suvimuktacitta …… suvimuttacitta (*SN* I. 126, 141)

suvimuktaprajña …… paññāvimutta (*Sn* 847, etc.)

mahānāga …… mahānāga (*Ud* 40, etc.)

ṣaḍabhijña …… chaḷabhiñña (*SN* I. 191)

vaśībhūta …… vasībhūta (*SN* I. 132)

aṣṭavimokṣadhyāyin …… aṭṭha vimokkhā (*DN* III. 261)

balaprāpta …… balappatta (*SN* I. 110, 158)

abhijñātābhijñāta …… abhiññātā abhiññātā (*DN* I. 235, etc.)

sthavira …… thera (*Dh* 260, etc.)

mahāśrāvaka …… mahāsāvaka (Siamese *Mil* 2)

以上の中，注意すべき語について検討してみよう。まず，上にあげた Pāli 語の中で，文献的に見て部派時代になってからよく用いられるようになったと思われる語は，最初の nikkilesa と最後の mahāsāvaka である。だから，*Sukh* の表現は部派時代に熟した用例に従ったものだろう。ただしかし，これらの語のもとになった kilesa, sāvaka という語は，原始経典にすでによく用いられているものであるから，その意味では原始経典と密接なつながりを持つことはいうま

でもない。

次に uttamadamaśamathaprāpta は諸本によって異伝が多い。いまは荻原本の訂正によったが，これは Cal. 本 (1 b 5)，東大本 No.43 (2 a 2) 及びチベット訳 (220.9) の dul ba daṅ shi ba mchog thob pa によって支持される[22]。Pāli との対比からすれば，uttamadamathaśamathaprāpta の形が想定されるが[23]，これを支持する伝承はない。Oxford 本のみは uttamadamathaprāpta とあって，damatha の形を残しているが（その代わりに śamatha を欠く），他の参照した写本にはすべて dama とある。dama と damatha とは意味内容において大差ないから，多くの写本のとる伝承を尊重すべきであろう[24]。足利本には uttamadamane śamatha° とあるが，これを支持する写本は他に存しない[25]。大谷本の uttamadamasamarthaprāpta は Bir 本 (1 b 7)，東大本 No. 63 (2 a 2) によって支持されるが，しかし恐らく採用すべきものではないだろう。

次に，suvimuktaprajña に対同する Pāli 語は paññāvimutta と見なされるが，両者の合成語の構成はちょうど逆になっている。Skt. では「よく解脱した慧をもてるもの」「慧がよく解脱したもの」の意であるのに対して，Pāli では「慧によって解脱したもの」の意であって，厳密には意味が異なる。Pāli 聖典には，「慧による解脱」(paññāvimutti) は殆んど常に「心の解脱」(cetovimutti) と並説されているから[26]，それに準じて「慧の解脱」という意味にも解しうる余地があるけれども，しかし suvimuktaprajña にそのまま合する Pāli 語は存在しないようである。しからば，この語は恐らく北伝系において作られたものであろう。前記の *AsP* や *SP* においても，この語が用いられているから，初期大乗仏教においては広く行なわれていたものと考えられる。

次に，abhijñātābhijñāta は *Sukh* と *Sm. Sukh* の両方に出てくるもので，問題のある語である。*Sukh* の Oxford 本及び大谷本では abhijñānābhijñaiḥ（神通に知通している，神通を得ている）とあり，

足利本では abhijñānābhijñātaiḥ（神通をもって知られている，神通で有名な）とあり，*Sm. Sukh* の Oxford 本では足利本と同じになっている。しかし，このような読み方には再検討の余地がある。わたくしは，これは元来 abhijñātābhijñāta（極めてよく知られている，非常に有名な）という語ではなかったかと推定する。その理由を述べてみよう。

① Pāli 聖典では abhiññātā abhiññātā (pl. 非常に有名な）という表現がよく用いられており，しかもそれが *Sukh* と同じように長老弟子たちの形容に用いられている場合がある (*MN* I. 212; III. 79: abhiññātehi abhiññātehi therehi sāvakehi saddhiṃ)。したがって，*Sukh* に見られる表現は，もとはこの Pāli 形と同じように Āmreḍita / Āmeṇḍita（くりかえし）の用法であったと見ることができよう。

② 足利本によると，仏弟子名を列記した後に再び出てくる abhijñānābhijñātaiḥ (2.10) は，底本では abhijñātā[bhi]jñātaiḥ とある。これは京大本 (2 b 1) でも同じである。この語は Oxford 本 (6.12) ではやはり abhijñānābhijñaiḥ とするが，大谷本 (2.24) では abhijñātābhijñaiḥ とあり，諸写本もわたくしが見た限りでは，このような読み方をとるものが多い[27]。したがって，これらの点を勘案すると，足利本の底本及び京大本の abhijñātā[bhi]jñātaiḥ の伝承を尊重すべき立場が出てくる。

③ *Sm. Sukh* の Oxford 本に見られる abhijñābhijñātaiḥ という.のは，Max Müller の見解によるもので，石山寺本をはじめ諸悉曇本には abhijnātābhājñātaiḥ とあり，これは abhijñātābhijñātaiḥ と読むべきことを示している。足利校訂本，木村本はともに，この読み方を支持している。

④ *SP* 1.9 に出てくる abhijñānābhijñātair は，刊本の註記によると，諸写本によって異同が多く，写本 B (British Museum 本) 及び写本 O (Petrovskij 本)[28]では abhijnātābhijñātair とあると記されている。これは，上記の読み方に文献的傍証を与えるものである。

⑤ 漢訳を見ると，*Sukh* の場合，『無量清浄平等覚経』は「神通飛化」，『無量寿経』は「神通已達」，『大乗無量寿荘厳経』は「具大神通」とあるが，『無量寿如来会』には「衆所知識」とあり，また *Sm. Sukh* の羅什訳に同じく「衆所知識」，玄奘訳に「衆望所識」とあって二系統に大別される。ところで，後者の訳は「多くの人たちに知られた」という意味であるから，abhijñātābhijñāta の訳と考えられる。とくに羅什は『法華経』巻1（『大正蔵』9巻，1頁下）やその他の訳経でも常に「衆所知識」の訳語を使い，また『注維摩詰経』巻1（『大正蔵』38巻，328頁下）ではこの語について「什曰，梵本云多知多識」といっているのが注意される。

⑥ abhijñānābhijñaiḥ あるいは abhijñānābhijñātaiḥ の合成語においては，abhijñāna は「神通」の意味に解されているが，しかし *Sukh* では一般に「神通」をあらわす語は abhijñā であり（37.9；49.14；52.7；53.19；54.2），abhijñāna が他で使われる例はない。また，とくに *Sukh* の context を見ると，この語が現われる直前には ṣaḍabhijña（六神通をそなえた）という語が用いられているから，その上にさらに「神通を得た」という語を使ったとするのはおかしい。これはやはり「非常によく知られた」という意味に使われたものであろう。この意味ならば，後文に仏弟子名を記した後に再び用いられるのも不自然ではない。

以上の点から，わたくしは abhijñātābhijñāta の読み方が本来のものであり，それは，もと原始経典に由来する用法であったと推定したい。もっとも，諸写本に示されるように，このような読み方は，これまで必ずしも正しく理解されてこなかったと思われる。前記のごとく，*Sukh* の漢訳には古くから「神通」の意味で解する説もあり，またチベット訳にも mṅon par śes pa mṅon par śes pa[29]（神通に知通した）とあるから，これを abhijñānābhijñaiḥ または abhijñānābhijñātaiḥ と解する説は，相当古くからあったと考えられるからである。

2) atha khalv āyuṣmān Ānanda utthāyāsanād ekāṃsam* uttarāsaṅgaṃ kṛtvā dakṣiṇaṃ jānumaṇḍalaṃ pṛthivyāṃ pratiṣṭhāpya yena bhagavāṃs tenāñjaliṃ praṇamya bhagavantam etad avocat (*Sukh* 2.14–17＝W 6.15–17; cf. *Sukh* 6.28～7.3＝W 16.6–8)

* 足利本には ekāṃśam とする。

[Pāli] (a) atha kho āyasmā Vaṅgīso uṭṭhāyāsanā ekaṃsaṃ cīvaraṃ katvā yena bhagavā ten' añjaliṃ paṇāmetvā bhagavantaṃ etad avoca (*Sn* p. 79; cf. pp. 60, 100)

(b) evaṃ vutte Ārāmadaṇḍo brāhmaṇo uṭṭhāyāsanā ekaṃsaṃ uttarāsaṅgaṃ karitvā dakkhiṇaṃ jānumaṇḍalaṃ puthuviyaṃ nihantvā yena bhagavā ten' añjaliṃ paṇāmetvā …… (*AN* I. 67; cf. III. 238)

これは，古代インドのいわゆる「偏袒右肩長跪合掌」(『無量寿経』巻上) という敬礼作法をあらわす文で，*Sukh* には二度用いられている。他の大乗経典でもよく用いられている文であって (e.g. *SP* 100. 4–7; cf. *Mvy* 6276–6278)，その由来するところが原始経典にあることは，Pāli の (a) (b) の慣用文と対比してみると明らかである。

Skt. 文の dakṣiṇaṃ jānumaṇḍalaṃ (右の膝がしら) は，Oxford 本 (6.16; 16.7) によると dakṣiṇa-jānu° という合成語になっているが (大谷本 14.11 も同じ)，Pāli では，これに対応する dakkhiṇa-jānumaṇḍalaṃ という形も用いられているから (e.g. *AN* II. 21; III. 238)，どちらの形であっても問題はない。

3) viprasannāni ca tava bhagavata indriyāṇi pariśuddhaś chavivarṇaḥ paryavadāto mukhavarṇaḥ pītanirbhāsaḥ tad yathā śāradaṃ vadaraṃ* pāṇḍu pariśuddhaṃ paryavadātaṃ pītanirbhāsaṃ evam eva bhagavato viprasannānīndriyāṇi pariśuddho mukhavarṇaḥ paryavadātaś chavivarṇaḥ pītanirbhāsaḥ, tad yathāpi nāma bhagavañ jāṃbūnadasuvarṇaniṣko dakṣeṇa karmāreṇa karmāraputreṇa volkāmukhena** saṃpraveśya suparinisṭhitaḥ pāṇḍukambala*** upari

kṣipto 'tīva**** pariśuddho bhavati paryavadātaḥ pītanirbhāsaḥ evam eva bhagavato viprasannānīndriyāṇi pariśuddho mukhavarṇaḥ paryavadātaś chavivarṇaḥ pītanirbhāsaḥ (*Sukh* 2.17～3.4＝W 6.17～8.8)

* 後述による。

** Oxford 本及び足利本底本による。

*** Oxford 本，大谷本による。

**** 足利本の 'tīvapariśuddho を Oxford 本，大谷本によって切る。

[Pāli] bhoto Gotamassa vippasannāni indriyāni parisuddho chavivaṇṇo pariyodāto, seyyathāpi bho Gotama sāradaṃ badarapaṇḍuṃ* parisuddhaṃ hoti pariyodātaṃ evam eva bhoto Gotamassa vippasannāni indriyāni parisuddho chavivaṇṇo pariyodāto. …… seyyathāpi bho Gotama nekkhaṃ jambonadaṃ dakkhakammāraputtena** suparikammakataṃ ukkāmukhesu*** kusalasampahaṭṭhaṃ paṇḍukambale nikkhittaṃ bhāsate ca tapate ca virocati ca evam eva bhoto Gotamassa vippasannāni indriyāni parisuddho chavivaṇṇo pariyodāto (*AN* I. 181 ; cf. *SN* I. 65)

* PTS 版では bhadara° とあるが，シャム版 *AN* I. 232.19 及び PTS 版 *Manorathapūraṇī* II. 292.1 によって改める（cf. *PTSD*, s. v. bhadara）。

** *SN* の読み方による。

*** *AN* 及び *SN* の註記に示された異本によって加える。

これは仏の諸根澄浄をあらわす文で，*Sukh* ではそれを二つの譬喩をもって説明している。これにほぼ相当する文は Pāli の *AN* にあるから（その相当漢訳は欠くけれども），それと同種の経典の説を受けたものであろう[30]。Pāli では，ゴータマの諸根澄浄を示す文[31]は，慣用句としてこの他に処々に説かれているものであり（e.g. *DN* II. 190 ; *MN* III. 293 ; *SN* II. 275），また二つの譬喩の中で後の「ジャンブー河産の金」の譬喩のほうは *SN* I. 65 にも見出される。なお，これに類する譬喩は，他の大乗経典にも認められるから[32]，当時よく

流布されていたものと思われる。

Sukh の文について，荻原本は最初の indriyāṇi pariśuddhaś chavivarṇaḥ paryavadāto mukhavarṇaḥ を，チベット訳に対照して indriyāṇi pariśuddho mukhavarṇaḥ paryavadātaś chavivarṇaḥ に改めている。これによれば，後文と文体がそろうことになるが，Oxford 本，大谷本，足利本いずれもこのようにはなっていないので，いまはそのままにしておく。同じように，次に出てくる tad yathā も Oxford 本や大谷本では tad yathāpi nāma とあって，後文の用例と対応するが，いまは足利本のままにしておく。写本の中では京大本 (2 b 6) のみが足利本と同じである。

次に，vadaraṃ の語については問題がある。これは Oxford 本によると vanadaṃ とあるが，これを支持する写本は，わずか一本(註記の A本) のみである。vanada は Skt. の古典辞書にのみ出るもので「雲」の意とされるけれども，男性名詞であり，いまの文にあげるように中性形の用例はない (cf. O. Böhtlingk u. R. Roth, *Sanskrit-Wörterbuch*, s. v.)。そこで，Edgerton は中性名詞としての vanada を BHS と見ているが (*BHSD*, s. v.)，荻原改訂本ではチベット訳 (222.8) に gos (衣) と訳されている点から，これを vastraṃ (衣) の写誤としている。だが，これでは「雲」よりはかえって意味が通じない。足利本には Oxford 本の vanadaṃ が採用されているが，しかし底本では varadaṃ とあったことが追記されている (p. vii: Addenda et Corrigenda)。そして，これは他の写本によって支持される (Bib. 本 3 a 4; Bir 本 2 a 9; 京大本 2 b 6; 東大本 No. 27, 3 a 5; No. 43, 3 a 2; No. 63, 3 a 4; No. 393, 2 b 6; No. 399, 2 b 5)[33]。大谷本 (4.10) でも baradaṃ とある。したがって，これらの点から見て，vanadaṃ は恐らく varadaṃ の ra を na と読んだものであろう。ところで，varadaṃ という Skt. 語は，辞書によるとやはり中性名詞として用いられる用例はなく，またいまの context に相応する意味も見当たらぬが (*Sanskrit-Wörterbuch*, s. v.)，これを Pāli と対照して

みると，badara（なつめ）に当たるから，恐らくもとは vadaraṃ であったと推定される[34]。写本においては ba と va との混用は普通に見られるものであり，また da と ra とは，写誤・転置されたものであろう。これは，前に śāradaṃ とあるのに影響されたのかも知れぬが，ともかくもともとは Pāli と同様に「秋のなつめ」の淡黄色が澄浄の喩説に用いられていたと解される。

次に，*Sukh* の ulkāmukhena について，荻原本も足利本もともにこれを °mukhe に訂正している。Edgerton (*BHSD*, s. v.) もこの読み方を better とする。大谷本 (4.15) でも °mukhe とあり，これを支持する写本も他にある (Bib. 本 3 a 6；Bir. 本 2 b 3)。しかし，すでに辻直四郎博士が指摘しておられるように[35]，BHS (cf. *Gr.* § 7.32) の用法からみて，これは必ずしも改訂を要しない。写本の上でも °mukhena の読み方を支持するものとしては，Oxford 本及び足利本底本のほかには，京大本 (3 a 1)，東大本 No. 399 (3 a 2：°mukhana) がある。

4） bahujanahitāya …… bahujanasukhāya lokānukampāyai mahato janakāyasyārthāya hitāya sukhāya devānāṃ ca manuṣyānāṃ ca (*Sukh* 4.4–7＝W 10.4–6)

[Pāli] bahujanahitāya bahujanasukhāya lokānukampāya atthāya hitāya sukhāya devamanussānaṃ (*Vin* I. 21；*DN* II. 45；*MN* I. 21；*SN* I. 105；*AN* I. 22；*Ud* 62；*It* 11, etc.)

これは大衆の利益のためであることを表わす場合に用いられる慣用句で，原始経典以来用いられるものである。部派文献では，たとえば *Mv* I. 330.8–9；331.8–9；332.12–13 に，大乗経典では，たとえば *SP* 41.1–2；42.2–3，12–13；81.1–2；167.1–2；170.9–10；173. 11–12；178.6–7；479.11–12 に *Sukh* と同文が見られる。Skt. 文の mahato janakāyasya に当たる句は，いまの Pāli 文には存しないが，しかし Pāli では大衆を表わすのに mahā janakāyo という語を用いている

場合もあるから（*MN* II. 5），無縁の表現ではない。

5）ākāṅkṣann* Ānanda tathāgata ekapiṇḍapātena kalpaṃ vā tiṣṭhet kalpaśataṃ vā kalpasahasraṃ vā kalpaśatasahasraṃ vā yāvat kalpakoṭīnayutaśatasahasraṃ vā tato vottari (*Sukh* 4.12–15 ＝W 10.10–12)

* Oxford 本，大谷本による。

[Pāli] so ākaṅkhamāno Ānanda tathāgato kappaṃ vā tiṭṭheyya kappāvasesaṃ vā (*DN* II. 103；*SN* V. 259；*AN* IV. 309；*Ud* 62)

Sukh の文に対応する Pāli 文は，*DN 16 Mahāparinibbāna-s.* において仏陀の入滅に際して阿難が仏陀の延寿・住劫を請うべきことを説く場合に関説される有名な文である。この Pāli 文に直接対同する Skt. 文も有部の文献にあるが (*MPS* 204–205；*Divy* 201)，*Sukh* はこのような原始経典の説を受けて，これを増広したものと考えられる。この説は，部派仏教では，いわゆる神通力論や留多寿行論の経証として，各部派の間で広く取上げられていたものであり (*Mil* 140–142；*Kvu* 456–458；『大毘婆沙論』巻 126＝『大正蔵』27巻，657 頁下)，*Sukh* の編纂者たちにはよく知られていたものであろう[36]。

6）samyaksaṃbuddhānām Ānanda loke sudurlabhaḥ prādurbhāvaḥ, tad yathodumbarapuṣpāṇām loke prādurbhāvaḥ sudurlabho bhavati (*Sukh* 4.18–20＝W 10.15–16；cf. *Sukh* 64.9–10＝W 148.8)

[Pāli] (a) tathāgatassa bhikkhave arahato sammāsambuddhassa pātubhāvo dullabho lokasmiṃ (*AN* I. 266；III. 168, 240, 441；cf. *AN* I. 22)

(b) dullabhāyaṃ dassanāya puppham udumbaraṃ yathā (*Vv* 47)

諸仏の出現が得難いという思想は，原始経典において古くから存する (e. g. *Dh* 182；*DN* II. 168 G)。しかし，*Sukh* の文に対応するものといえば，Pāli では上の(a)(b) の両文になるであろう。udumbara

（優曇，優曇鉢，霊瑞）華の譬喩は，*Sukh* には後にもう一度現われ (53.6-7＝W 122.14-15)，他の大乗経典でもよく用いられているが (e.g. *SP* 39.8；*LV* 105.1)，Pāli では上記の *Vv* のような後期の Nikāya に見られる例以外にはあまり認められない (udumbara そのものはよく知られているが，仏の出現と結びつけて用いられることは少ない)。しかし，北伝系統では比較的早くからこの譬喩は説かれていたようである。たとえば *MPS* 356，394 にはこの譬喩が用いられており，また相当の『長阿含経』巻4「遊行経」(『大正蔵』1巻，26頁中) などの諸漢訳にも，同じように認められる。したがって，*Sukh* の表現は，直接的には北伝系の部派において熟していた表現を受けたものであろう。

7) tena hy Ānanda śṛṇu sādhu ca suṣṭhu ca manasikuru*. bhāṣiṣye 'haṃ te. evaṃ bhagavann ity āyuṣmān Ānando bhagavataḥ pratyaśrauṣīt (*Sukh* 5.4-6＝W 12.1-3)

* 足利本は manasi kuru と切っているが改める。Oxford本は切らない。

[Pāli] tena h' Ānanda suṇāhi sādhukaṃ manasikarohi bhāsissāmī ti. evaṃ bhante ti kho āyasmā Ānando bhagavato paccassosi (*AN* I. 227； cf. *DN* I. 124；*MN* I. 1；*SN* II. 1；*Sn* p. 21, etc.)

これは，仏陀が説法を開始するときによく用いられる慣用句で，原始経典においてすでに固定していたものであることは，Pāli 文の示すごとくである。他の大乗経典においてもしばしば用いられる。たとえば *SP* 38.10-11；332.8；346.5-6 (ただし evaṃ 以下はなし。cf. *Mvy* 6315-6316) 参照。

8) bhūtapūrvam Ānandātīte 'dhvanīto 'saṃkhyeye kalpe 'saṃkhyeyatare vipule 'prameye 'cintye yadāsīt tena kālena tena samayena Dīpaṃkaro nāma tathāgato 'rhan samyaksaṃbuddho loka udapādi (*Sukh* 5.7-10＝W 12.4-7)

[Pāli] (a) bhūtapubbaṃ bhikkhave rājā ahosi Aruṇavā nāma …… rājadhāniyaṃ Sikhī bhagavā arahaṃ sammāsambuddho upanissāya vihāsi (*SN* I. 155)

(b) ito so bhikkhave ekanavuto kappo yaṃ Vipassī bhagavā arahaṃ sammāsambuddho loke udapādi (*DN* II. 2, 11)

Skt. 文は *Sukh* における諸々の過去仏の中の第一 Dīpaṃkara（燃燈）仏の出世を述べる文である。Pāli には，これに literal に合する文はないけれども，いわゆる過去七仏について記せられる文の中には，上掲の (a)(b) のように類似の表現を持つものが認められる。bhūtapubbaṃ ではじまる文は，Pāli 聖典における過去世物語の類型的表現であり，*Sukh* の文はそれを受けたものといってよい。原始経典では過去七仏の出世年代は，上掲のごとく，Vipassin 仏の 91 劫を最大限として有限なものと見られているが[37]，しかしこのほかに過去仏としては Dīpaṃkara 仏への言及が Nikāya の後期経典 *Buddhavaṃsa* 及び漢訳では『増壱阿含経』巻 11，13，38，40 や『四分律』巻 31 などに認められ，その場合には Pāli によると，「四阿僧祇百千劫の〔前〕に」(kappe ca satasahasse ca caturo ca asaṅkhiye) (*Bv* 6) とも「今より無量劫の前に」(aparimeyye ito kappe) (*ib.* 66) 出世するともいわれ，また『増壱阿含経』(『大正蔵』2 巻，597頁中，757頁下) では「昔過去無数劫時」「無数阿僧祇劫」などといわれている[38]。*Sukh* で Dīpaṃkara 仏が「むかし過去世の時，いまを去ること無数劫の，さらに無数・広大・無量・不可思議〔劫の〕時」出世したというのは，恐らくこうした説を背景としているものであろう。そして，このような表現は，初期大乗経典において過去仏の出現を説く場合の型となっている (e.g. *SP* 156.1–3, 375.9～376.1；431.6–8；457.2–4；*Gv* 380. 21–22；*Suv* 174.2–4)。

9) tathāgato 'rhan samyaksaṃbuddho loka udapādi vidyācaraṇasaṃpannaḥ sugato lokavid* anuttaraḥ puruṣadamyasārathiḥ śāstā

devānāṃ** ca manuṣyāṇāṃ ca buddho bhagavān (*Sukh* 6.20–23 =W 14.18～16.2)

* 足利本に lokavidanuttaraḥ とあるのは誤植。

** 足利本に devānaṃ とあるのは誤植。

[Pāli] tathāgato loke uppajjati arahaṃ sammāsambuddho vijjācaraṇasampanno sugato lokavidū anuttaro purisadammasārathi satthā devamanussānaṃ buddho bhagavā (*DN* I. 62; *MN* I. 179; *SN* IV. 320; *AN* I. 168; *Ud* 79, etc.)

これは，いわゆる「如来の十号」を示す文であって，Skt. 文と Pāli 文は，十号の名称及び順序について完全に一致している。ただ，Pāli 文では構文上 tathāgata を主語として用いるのが明瞭であることは注意すべきである。Pāli 聖典では tathāgato の代わりに bhagavā を主語的に用いる場合も多いが (*DN* I. 49; III. 76; *MN* I. 37; *SN* II. 69; *AN* I. 180, etc.)，いずれにしても，これによって十号が arahaṃ より bhagavā までの十の名称を指すことが明白になっている。この点，Skt. 文（及びチベット訳と漢訳）は必ずしも明白ではないけれども，Pāli に準じて理解すべきであろう。なお，十号のうち最初の部分，すなわち tathāgato 'rhan samyaksaṃbuddhaḥ の三語のみを並記することもしばしば認められるが (*Sukh* 9.10 etc.)，これもむろん原始経典以来の用法である (*AN* I. 22 etc.)。

10) (A) tasmin samaye saṃmukham ābhir gāthābhir abhyaṣṭāvīt (*Sukh* 7.4=W 16.8–9; cf. *Sukh* 8.21–22=W 20.12)

(B) tasyāṃ velāyām [……] imā gāthā abhāṣata (*Sukh* 21.14–15 =W 46.1–2; *Sukh* 41.2–3=W 92.3; *Sukh* 43.23–24=W 100.1–2; *Sukh* 64.17–18=W 148.14)

[Pāli] (a) sammukhā sāruppāhi gāthāhi abhitthavi (*Sn* pp. 79, 100, 108, etc.)

(b) imā gāṭhā abhāsi (*MN* II. 64; III. 153, etc.)

Sukh においてガーター（偈頌）が説かれる場合には，上掲の (A) と (B) の二つの型の文が用いられている。ところで，この二つの文は，すでに原始経典において固定していた表現を受けたものと思われる。Pāli 聖典を見ると，ガーターを説く場合には，いろいろな型の文が認められるが，いまの *Sukh* に用いられている型に対応する文も上掲 (a) (b) のごとくに認められるからである。もっとも，上の Pāli 文には *Sukh* に示される tasmin samaye (A) 及び tasyāṃ velāyām (B) に当たる語はないが，しかしもとよりこれらに対応する Pāli 語は他に存する。たとえば，tamhi samaye …… dhammaṃ deseti (*Sn* 1015)； tāyaṃ velāyaṃ imaṃ udānaṃ udānesi (*Ud* 1) というごとくである。

11) anuttarāṃ samyaksaṃbodhim abhisaṃ-√budh (*Sukh* 8.26＝W 20.15–16；*Sukh* 10.17–18, 22＝W 24.7–8, 14, etc.；*Sm. Sukh* 208.16–17, 20)

[Pāli] anuttaraṃ sammāsambodhiṃ abhisam-√budh (*DN* II. 83；*MN* I. 6；*SN* I. 68；*AN* I. 259, etc.)

これは「無上なる正等覚を証得する」ことをあらわす場合に用いられる定型句であって，いわゆる同族目的語 (cognate object) 的表現をとっているが，原始仏教聖典においてすでに固定した表現である。大乗経典では *Sukh* のみならず，他でも広く用いられている (*SP* 21. 13；*LV* 10.14；*RP* 48.11；*Suv* 90.5–7, etc.)

12) arthakāmo hitaiṣy anukampako 'nukampām upādāya (*Sukh* 9.14–15＝W 22.5)

[Pāli] atthakāmā hitesino anukampakā anukampaṃ upādāya (*AN* III. 37; IV. 265–268；cf. *AN* III. 6；*Ud* 25)

Sukh に見られる「利益を欲し求め，哀愍をあらわす」という意味の句は，Pāli 聖典にもそのまま対同する句を見出すことができる。

Sukh においては，他の箇所では arthakāmānāṃ hitaiṣiṇām anukampakānāṃ という表現が用いられ (4.20-21＝W 10.17)，さらに他の箇所では anukampām upādāya という句も用いられている (16.5＝W 36.1)。この anukampām upādāya は他の大乗経典にもよく使われている idiom であるが (*SP* 166.1,2; *LV* 6.2, etc.)，もとは原始経典の用法を受けたものである (*DN* I. 205; *MN* I. 46; *SN* I. 183; *AN* I. 64, etc.)。

13) bhagavato …… tathāgatasya pādau 'sirasā vanditvā pradakṣiṇīkṛtya …… prākrāmat (*Sukh* 9.21-22＝W 22.10-12; cf. *Sukh* 10.7＝W 22.18; *Sukh* 44.18-19＝W 102.6-7)

[Pāli] (a) bhagavato pādesu sirasā nipatitvā (*Sn* pp. 15, 101, etc.)

(b) bhagavantaṃ …… padakkhiṇaṃ katvā pakkāmi (*Vin* I. 17, 73, etc.)

「仏の両足を頭にいだいて敬礼し，右まわりにまわって退く」というのは，古代インドにおける貴人に対する礼法である。それが，すでに原始仏教時代において行なわれていたものであることは，Pāli 文の (a) (b) が示している。

14) prasannacittā mām anusmareyus (*Sukh* 13.24＝W 30.15)

[Pāli] pasannacittā anussaranti (*MN* I. 33; *AN* V. 132; cf. *MN* I. 210-211; *AN* I. 207-211; *Therag.* 382-384; *Ap* 261)

「澄浄な心で随念する」という句は，*Sukh* の本願文の第 18 願（来迎引接願）に出るもので，他の諸異本にもほぼ相当句を読みとることができる。そして，これはまた恐らく『無量寿経』第 18 願（念仏往生願）に示される「至心信楽」という句と連絡を持つものであるという意味で，極めて重要な箇所である。ところで，これが原始経典以来の伝統的表現を受けたものであることは，Pāli に同類の句が認められることによって知られる。これは浄土経典の念仏の内容が，原始仏

教と深いつながりにあることを示しているのである[39]。

15) cīvarapiṇḍapātaśayanāsanaglānapratyayabhaiṣajyapariṣkāraiḥ (*Sukh* 16.1–2＝W 34.17; *Sukh* 25.6–7＝W 56.1–2)
[Pāli] cīvarapiṇḍapātasenāsanagilānapaccayabhesajjaparikkhārehi (*DN* I. 61; *Vin* I. 248; *MN* I. 33; *SN* IV. 288; *AN* I. 49; *It* 111, etc.)

これは「衣・食・住・薬」の四種の生活必需品を示す cliché である。すでに原始仏教時代に出家修行者の日常生活に必要な資具として定められていたものである。

16) satkuryāmo gurukuryāmo mānayemaḥ pūjayemaḥ (*Sukh* 15.25～16.1＝W 34.16); satkṛtā gurukṛtā mānitāḥ pūjitā[ḥ] (*Sukh* 25.6, 14＝W 54.17; 56.7)
[Pāli] sakkaroti gurukaroti māneti pūjeti (*DN* II. 74, 77; *MN* I. 29, 140, 336; *AN* III. 196, etc.)

「恭敬・尊重・尊敬・供養」(sat-√kṛ, guru-√kṛ, √man, √pūj という四つの同義語を列挙する表現は，*Sukh* には二度現われるが，これは他の Skt. 経典にもしばしば認められるものであり (*SP* 225.6–7; 302.14; 395.7; *Suv* 68.2–3; 83.11; *Mv* II. 119.9; *MPS* 112, 122, 360, 408, etc.)，溯っては上掲のごとく Pāli で慣用化されていた表現である。Pāli では，この四語にさらに apacāyati (尊崇する) を加える用例も頻繁にあり (*DN* I. 91, 116; III. 84; *MN* I. 126; *AN* I. 109; *Ud* 6, 12, 30, 43, 72, etc.)，これも Skt. 経典に受けつがれているが (*Mv* I. 34.2; 57.9, 14; *SP* 227.10, etc.)[40]，ただし *Sukh* にはかかる用例はない。

17) sadevakasya lokasya samārakasya sabrahmakasya saśramaṇa-brāhmaṇikāyāḥ prajāyāḥ sadevamānuṣāsurāyāḥ (*Sukh* 23.19–21

=W 52.6–7)

[Pāli] sadevakassa lokassa samārakassa sabrahmakassa sassamaṇa-brāhmaṇiyā pajāya sadevamanussāya (*DN* III. 135; cf. *DN* I. 62; *MN* I. 108; *SN* I. 160; *AN* I. 259; *Sn* p. 48, etc.)

これは「一切の世界」をあらわす慣用句で，原始経典にすでに成立していたものである。Skt. 文は Pāli 文と比較すると，「沙門・バラモンを含む」という表現に nikāya（集まり）の語を加えている点，及び「神々と人々を含む」という語に，さらに asura（阿修羅）を加えている点に増広が見られるほかは全く一致する。大乗経典では，この *Sukh* と同じ文を用いるのが一般的であるが (*SP* 21.7–8; 166.14–15; 173.10–11; *Suv* 9.17–18), Pāli とほぼ同型文を用いる場合もある (e.g. *LV* 3.5–6)。

18) subharaḥ supoṣo 'lpecchaḥ* saṃtuṣṭaḥ (*Sukh* 24.5–6=W 52.15–16)

* Oxford 本，大谷本による。

[Pāli] subharatāya suposatāya appicchassa santuṭṭhassa (*Vin* I. 45; II. 2)

いわゆる「易満・易養・少欲・知足」(cf. *Mvy* 2370–2377, 2937) をあらわす cliché である。Pāli では律に相当句があるが，Nikāya には見当たらぬようである。しかし，これに類同する句は認められるから (e.g. *MN* I. 13: appicchatāya santuṭṭhiyā sallekhāya subharatāya)，原始仏教時代に大体固定した表現と見てよいであろう。

19) sarvalokābhirūpaś cābhūt prāsādiko darśanīyaḥ paramaśubha-varṇapuṣkalatayā samanvāgataḥ (*Sukh* 25.22–24=W 56.13–14)

[Pāli] abhirūpo hoti dassanīyo pāsādiko paramāya vaṇṇapokkha-ratāya samannāgato (*DN* I. 120; cf. *Vin* I. 268; *DN* I. 114; *MN* II. 165; *SN* I. 95; *AN* II. 86, etc.)

Sukh の文は Dharmākara 菩薩の容姿の端正を表わす文であるが，

Pāli ではこれに対同する文が，しばしば型のごとくに説かれている。それは仏陀をはじめ，バラモン，王族，長者，良家の子，婦人など，総じて人の容姿のすぐれて美しいことを示す場合に用いられている。バラモンの特色として五つの条項をあげるとき，その一つにこの formula を数えている点からも (*DN* I. 120)，これが原始仏教時代に固定した表現であることが知られる。

ところで，Skt. 文と Pāli 文とを対比してみると，°varṇapuṣkalatayā と vaṇṇapokkharatāya との間に，綴り方の相違があることに注意せられる。*PTSD* (s. v. pokkharatā) によると，pokkharatā は pokkhara (蓮華) から作られた語であり，splendidness, flower-likeness の意味に解され，BHS の puṣkalatā は，もし Pāli から作られたものとするならば，明らかに misconstruction であると記している。しかし，これに対しては，すでに Edgerton (*BHSD*, s. v. puṣkalatā) が批議しているように，直ちにそのように見ることはできない。これは Cl. Skt. 一般に用いられる puṣkala (すぐれた，見事な) から作られた語であると見ることができるからである。Skt. 仏典には，いまの *Sukh* の用例ばかりでなく，他にも puṣkalatā を用いる例が多く認められる (*Mv* I. 196.20; II. 422.2, 432.15; *Divy* 222.21; *Av* II. 202.13; *Suv* 175.5; *Bbh* 61.18; *Laṅk* 225.8; cf. *Mvy* 5219)。そしてこの点からみれば，Pāli の pokkharatā はむしろ puṣkalatā の misconstruction であるかも知れない。後代の Buddhaghosa も pokkaratā を註記して sundarabhāva (美貌の状態) の意であるとし，古註釈家たちが pokkhara を sarīra (身体) の意に解することもあったと記している (*Sumaṅgalavilāsinī* I. 282)。すなわち，これを「蓮華」と関係づけて解していないのである。

しかし，BHS の文献を見ると，この Pāli 語と同じ形の puṣkaratā も用いられている。上掲の *Sukh* の場合も，Oxford 本によるとそうなっており，その他の経典にも同じ用例が見出される (*Mv* I. 352.16; *SP* 263.7; *LV* 140.11)。したがって，BHS においては puṣkaratā

と puṣkalatā の二つの形が用いられていたことになり，後者は前者よりも Sanskritization が進んだ形を示しているのかも知れない。いまの *Sukh* の場合も見ても，足利本と同じ形をとっている写本もあれば（大谷本 50.23；京大本 21 b 7），また Oxford 本と同じ形をとっているものもある (Bib. 本 26 a 4；Bir 本 15 a 8)。チベット訳 (261.23) に kha dog bzaṅ po ryas pa mchog daṅ ldan pa（色はすぐれて広大に最勝をそなえている）とあるのは，puṣkalatā の所伝にもとづいた翻訳であろう（ゆえに，荻原博士はこのチベット訳と大谷本にもとづいて足利本のごとくに修正している)。

20) [Sukhāvatī nāma lokadhātur] ṛddhā ca sphītā ca kṣemā ca subhikṣā ca ramaṇīyā ca bahudevamanuṣyākīrṇā ca (*Sukh* 30.2–4 = W 66.17～68.1)

[Pāli] [Kusāvatī …… rājadhānī] iddhā c'eva ahosi phītā ca bahujanā ca ākiṇṇamanussā ca subhikkhā ca (*DN* II. 146–147, 170)

Sukh の文は極楽の描写の最初に出てくる表現である。異本ではチベット訳と『無量寿如来会』にしか相当文がないけれども，これに類する表現は，他の初期大乗経典にも認められるから (*AsP* 485.15–16；505.14；*SP* 65.9–10)，当時慣用化された表現であることが知られる。ところで，これは Pāli において上掲の Kusāvatī 王城について述べられる文とほぼ対同するから，古く原始仏教時代に成立した表現であることが知られる。この Pāli 文に相当する Skt. 文が回収されているが，それによると [Kuśāvatī ……] ṛddhā ca sphītā ca kṣemā ca s(ubhikṣā cākīrṇabahujanamanuṣyā ca) とあるから (*MPS* 304；cf. 102, 104, 106)，*Sukh* の表現に一層近くなっている。これと同じ文は *Divy* 315 にも認められる。Pāli 聖典では一般に都市 (nagara) や地方 (janapada) の繁栄・殷賑をあらわす場合には，上掲文の最後の subhikkhā ca を除いた文を用いるのが常であるから (*DN* I. 211；*MN* I. 377；*AN* III. 215, etc.)，この formula はかなり古くから固

定していたものと思われる。

21) śrotendriyābhāsam* āgacchati (*Sukh* 35.1-2＝W 78.7; cf. *Sukh* 36.4-5＝W 80.8-9**); śrotrendriyasyābhāsaṃ*** nāgacchati (*Sukh* 36.5-6＝W 80.9-10); śrotrāvabhāsam āgacchati (*Sukh* 48.1＝W 110.18; cf. *Sukh* 63.22****＝W 148.1); cakṣuṣa***** ābhāsam āgacchati (*Sukh* 48.4＝W 112.2)

* 足利本は京大本とチベット訳によって，これを śrotendriyānāṃ bhāsam と改めているが，その必要はないであろう。底本は Oxford 本，大谷本とも一致している。

** Oxford 本のこの箇所では śrotendriyāvabhāsam とする。大谷本も同じ。

*** Oxford 本では °syāvabhāsam とする。大谷本も同じ。

**** 足利本のこの箇所では śrotāvabhāsam とする。

***** Oxford 本及び大谷本による。足利本で cakṣuṣābhāsam とあるのは誤植であろう。

[Pāli] [cakkhuviññeyyā rūpā] cakkhussa āpāthaṃ āgacchanti …… [sotaviññeyyā saddā …… manoviññeyyā dhammā] manassa āpāthaṃ āgacchanti (*Vin* I. 184; *SN* IV. 160-162; *AN* III. 377-378; IV. 405; cf. *MN* I. 190)

耳もしくは耳根(聴覚器官ないし機能)に音が聞こえ，あるいは眼もしくは眼根にものが見えることを表わす場合，*Sukh* では「耳（根）あるいは眼の範囲 (ābhāsa, avabhāsa) に達する」という表現を用いている。ここで「範囲」と訳した ābhāsa もしくは avabhāsa (*Sukh* では両者が混用されている）という語は，元来 splendour, light, appearance の意味であるが，Edgerton (*BHSD*, s. v.) にしたがって，range, scope の意にとったのである。このような *Sukh* の用例は，Edgerton (*ib.*) が指摘しているように，他の Skt. 仏典にも多く認められるから（ābhāsa: *Mv* I. 6.3; *Śikṣ* 128.13; 129.3; 151.10; avabhāsa: *KP* 105.8; *Laṅk* 192.10, etc.)，北伝系統では一般に慣用化されていたものと見られる。

ところで，この慣用句に類似の表現が Pāli には眼・耳・鼻・舌・身・意の六根について説かれている。ただ，注意すべきは，Pāli では ābhāsa (Pāli: *ib.*), avabhāsa (Pāli: obhāsa) は用いられず，代わりに āpātha という語が用いられている。*PTSD* や *CPD* によると，この語には sphere, range, field 等の訳語を与えているが，etymology は必ずしも明確には知られていない[41]。Skt. 仏典が，この語を用いず，これに代わる他の語を用いるようになったのは，こうした語源的不明確さによるのかも知れない。

22) na bhāsate na tapati* na virocate (*Sukh* 38.22, 24＝W 86.12–13, 14–15); bhāsamānaṃ tapantaṃ virocamānaṃ [vibhrājamānaṃ] (*Sukh* 55.26＝W 128.11)

* Oxford 本，大谷本は tapate とする。

[Pāli] bhāsate ca tapate ca virocati ca (*SN* I. 65; III. 156; V. 44; *AN* I. 181, 242; *It* 19–21)

「光り輝き照らす」という三つの語を羅列する cliché は *Sukh* では二度用いられているが（一度はさらに vi-√bhrāj も加えて四語とする），これは Pāli においてもしばしば認められる（前項 **3**）にあげた Pāli 文にも認められるが，その場合は *Sukh* には対同句はない）。Pāli 聖典では上掲のほかに，bhāsati ca tapati ca virocati ca (*MN* I. 317; II. 33–34, 41) という形もあり，また時には na tapanti na bhāsanti na virocanti (*Vin* II. 295–296) というように配列を変えている場合もある。なお，*SN* III. 156 の virocati は一写本によると virocate とあるが，この形は他に現われることはない。

23) imaṃ …… arthavaśaṃ* saṃpaśyantas (*Sukh* 43.14＝W 98.12); idam arthavaśaṃ saṃpaśyamāna[ḥ] (*Sm. Sukh* 202.19)

* Oxford 本，大谷本による。

[Pāli] imaṃ (*or* idaṃ) …… atthavasaṃ sampassamāno (*Vin* II. 184;

DN II. 285; *SN* I. 183; *AN* II. 240; *Ud* 19, etc.)

これは，道理・意義を認識することを表わす句で，*Sukh* と *Sm. Sukh* の両方に一度ずつ見出されるが，すでに古く Pāli で慣用化されていた表現である。arthavaśa は BHS で，Pāli の atthavasa に対応し，ともに reason, motive, cause, purpose などの意を持つ (*PTSD*, *CPD*, *BHSD*)。*Sukh* の足利本によると，arthavasaṃ とあるが，その註記を見ると，原本に arthaṃ vaśaṃ とあるのを *Mvy* 6685 を参照して改訂したようであるから，多分 arthavaśaṃ の誤植であろう。なお，*Sukh* の saṃpaśyantas（大谷本も同じ。Oxford 本は saṃpaśya とする）に対同する Pāli 形は sampassanto であるが，この Parasmaipada / Parassapada 形はいまの Pāli の慣用句には用いられていない。すべて Ātmanepada / Attanopada 形である。この点 *Sm. Sukh* の形のほうが，Pāli とよく合致する。

24) ko …… hetuḥ kaḥ pratyayo …… (*Sukh* 57.19-20＝W 132.15; cf. *Sukh* 46.4＝W 106.5)

[Pāli] ko …… hetu ko paccayo (*DN* I. 144; *MN* I. 25; *SN* II. 224; *AN* I. 55; *Ud* 50, etc.)

BHS には原因・理由を示す場合に，前例とは異なって幾つかの語を同義的に列記する idiom が存するが[42]，*Sukh* には hetu（因）と pratyaya（縁）とを並記して理由を問う用例が認められる。これは，他の大乗経典にも認められるものであるが (*SP* 8.5; 34.1; 240.8)，古く原始仏教以来の伝統的用法であることは，上に示した Pāli 文によって明らかである。ちなみに，このほかに理由を問う表現としては *Sukh* (4.11, 16; 28.6; 40.20; 42.4; 54.16; 63.3) には tat kasya hetoḥ がしばしば用いられ，*Sm. Sukh* には tat kasmād dhetoḥ (200.1; 202.8)，kena kāraṇena (200.15, 20) が用いられている。この中 tat kasya hetoḥ は Pāli でしばしば用いられる taṃ kisssa hetu (*DN* I. 18; *MN* I. 1; *SN* II. 24; *AN* I. 8; *It* 91, etc.) という句に

対同するものであろう[43]。

25) avakalpayanty abhiśraddadhaty adhimucyante (*Sukh* 58.4–5 =W 134.6)

[Pāli] saddahāmi adhimuccāmi okappemi (Siamese *CNd* 310); saddahantā okappentā adhimuccantā (*MNd* 62)

「信ずる」を表わす場合に，*Sukh* では上記の三つの同義語を並用することがある。この中，abhiśraddadhati (3 pl.) は，信の原語としてインド一般で最も普通に用いられる śrad-√dhā に前接字 abhi- を附したもので，「信ずる」ないし「深く信ずる」という意味を表わす語である。これに対して，avakalpayanti（信頼する）と adhimucyante（信解する，勝解する）を信の意味で用いることは，インド一般の文献には認められないもので，仏教独自の用法である。BHS における用例の若干は，すでに Edgerton によって採集されているが (*BHSD*)，*Sukh* としては，*Sm. Sukh* の石山寺本に avakalpayatha (2 pl. Impv.) という語を śraddadhādhvaṃ と同義語的に用いているのが注意せられる[44]。

ところで，このように異なった三つの語を並列する例は，Pāli においても認められる。ただし，それは上記のごとく *CNd*, *MNd* というような Nikāya 後期の註釈文献においてである。しかしそれ以前の比較的古い成立の Nikāya においても，adhimuccati については，これを saddahati と並用する例が少なからず見出されるから (e. g. *SN* III. 225–228)，かかる用例の一斑は原始仏教時代まで溯ることができる。okappeti (=avakalpayati) もこの語そのものは原始聖典に用いられていた語であるが，ただこれを saddahati と並用する例は，上掲の出典が初出のようである。okappeti と同語根の名詞形 okappanā は，同じく初期阿毘達磨文献 (*CNd* 303; *Dhs* 10, 12 etc.; *Vibh* 123) においては，saddhā の定義に用いられており，これは北伝の論書についても同じと見られるから，部派仏教の初期時代にはすでに信と同義語

的に慣用化されていたものと思われる。*Sukh* における用法は，恐らくそのような伝統的慣用を受けたものであろう。

ちなみに，*Sukh* 及び *Sm. Sukh* においては，信をあらわす語としては，このほかに prasāda (*Sukh* 18.11；42.7；43.3；59.20；62.12；64.26), prasanna (13.24；42.15；51.15)，pratīyati *or* pattīyati (*Sm. Sukh* 204.5 ff.) も用いられているが，それらもまたそれぞれ対同する Pāli 語 (pasāda, pasanna, pattiyāyati) があり，原始仏教ないし部派仏教の伝統を受けたものと見られる[45]。

26) rājñaḥ kṣatriyasya mūrdhābhiṣiktasya* (*Sukh* 58.20＝W 134.17)

* Oxford 本，大谷本による。

[Pāli] rañño khattiyassa muddhāvasittassa (*Vin* IV. 160；*DN* III. 69；*MN* I. 231；*SN* III. 144；*AN* I. 106, etc.)

「灌頂を受けたクシャトリヤの王」という表現は，Pāli 以来の伝統的表現を受けたものである。もっとも，「灌頂を受ける」(mūrdhābhiṣikta *or* mūrdhāvasikta) という語は，インドの叙事詩時代には，王の即位を表わす場合に一般に用いられていたもので (e.g. *MBh* 4. 6. 6；7. 125. 10)，別に仏教独自のものではない。しかし，*Sukh* における上記の句は恐らく原始経典以来の慣用句をそのまま受けたものといってよいであろう。足利本によると，mūrdhābhiṣiktasya は mūrdhnābhi° とあって，mūrdhan の instrumental case に解されるが，Skt. としては Oxford 本，大谷本のように合成語にとるのが一般的である (cf. *Mvy* 3672)。しかし *BHSD* (s. v. -mūrdhni *or* °na) には，合成語の後分であるけれども，mūrdhna (*or* °ni) という名詞形が一例あげられているから (*LV* 432.13)，もしこれに準ずるならば mūrdhnābhi° という読み方は，BHS による合成語と見なしうるであろう。

なお，Pāli の muddhāvasitta の avasitta は Skt. abhiṣikta とは異

なるが (avasikta に当たる)，Pāli でもビルマ写本には abhiṣikta に当たる abhisitta が用いられていることが多い (Footnotes on *DN* I. 69；III. 60；*AN* II. 87, etc.)

27) tasya ca tatra paryaṅkaḥ prajñaptaḥ syād anekagoṇikāstīrṇas tūlikāpalalikā*stīrṇaḥ** kāliṅgaprāvaraṇapratyāstaraṇaḥ*** sottarapaṭacchadana ubhayāntalohitopadhānaś citro darśanīyaḥ (*Sukh* 59.1-5＝W 136.6-8)

* 足利本の °palālikā° を修正する。

** この語の次に，足利本では kācilindikasukhasaṃsparśaḥ とあるが，Oxford 本，大谷本，チベット訳によって削除する。

*** Oxford 本，大谷本による（荻原博士の訂正を加える)。

[Pāli] tatr' assa pallaṅko goṇakaṭthato paṭikatthato paṭalikatthato kadalimigapavarapaccattharaṇo sa-uttaracchado ubhatolohitakūpadhāno (*MN* I. 76；*AN* I. 137；cf. *DN* II. 187；*SN* III. 144；*AN* III. 50；IV. 94, 231, 394)

これは，長椅子 (paryaṅka, pallaṅka) の説明文であって，Skt. 文と Pāli 文とが対同することは明らかである。Pāli では，上に類似の文が「高い臥床・大きな臥床」(uccāsayana-mahāsayana) の形容にも用いられており，その場合には，Skt. 文に見られる tūlikā という語も見出される (pallaṅko goṇako cittakā paṭikā paṭalikā tūlikā …… kadalimiga° ……：*Vin* I. 192；II. 163, 169；*DN* I. 7, 65；*AN* I. 181)。

ところで，このような Pāli 文と対比すると，Skt. 文における難解な語も解明できそうである。まず，毛布 (goṇikā, Pāli：goṇaka)，綿布 (tūlikā, Pāli：*ib.*) は問題ないとして，次の palalikā は難解な語である。これは，Oxford 本によると parṇakā（羽毛）とあり，大谷本 (124.15) や Bir 本 (35 b 3)，京大本 (62 a 2) では varṇakā（織布）とあるが，チベット訳 (312.1) に pa-la-li-ka と音写している点からみると，足利本の palalikā（足利本はチベット訳によって底本を

pa [lā] lika と復原するが，これは pa [la] likā とするほうがよいであろう）の所伝のほうによく合する。ところで，これは Pāli 文と対比してみると，恐らく paṭalikā に当たるものと考えられる。この語は，註釈によって「花模様を刺繍した毛布」「花毛氈」と解されているものである (*Sumaṅgalavilāsinī* I. 87 : paṭalikā ti ghana-puppho uṇṇāmayo attharako so āmilāka-paṭṭo ti pi vuccati)。注意すべきは *DN* II. 182 に当たる *MPS* 36 ; 326 にも palalikāstṛtaḥ とあり，出版者 E. Waldschmidt は Pāli 文に対照して[46]，これを paṭalikā° に改訂している。同じように，*Mv* II. 115.16 には phalikāstaraṇa とあり，英訳者 J. J. Jones (*The Mahāvastu*, II. 112. n.) は，これを paṭalikā° に読解している。したがって，いまの *Sukh* の palalikā も，もとは paṭalikā とあったのが転訛したと見ることができよう。Oxford 本や大谷本などの所伝は，この語の由来を見失ったために，後に改読したものであろう。

次に，問題となるのは kāliṅgaprāvaraṇapratyāstaraṇa である。これは「カリンガ産の覆いと覆物」の意に訳されるが，Pāli 語の kadalimigapavarapaccattharaṇa（カダリー鹿の最上の覆物）とは意味がかなり異なっている。しかし両者を対比してみると，言葉の上ではすこぶる類似しているから，どちらかが転訛した形であると考えられる。「カリンガ産の覆い」というのは，インドでは他に知られることがないのに対して，「カダリー鹿の皮」[47]のほうは知られているから一般的とみてよい。とすると，これは，恐らく Pāli 語の形のほうがもとではなかったかと推測される。Pāli の kadalimiga が，恐らく発音の上で kāliṅga と混同されたのではなかろうか。次に Skt. の prāvaraṇa（覆い）は Pāli の pavara（最上の）に対同するが，意味は全く異なる。しかし，これは Skt. で pravara（最上の）とすべきところを，prāvaraṇa と改変したと見れば，解釈がつくであろう。Skt. では prāvaraṇa は次の pratyāstaraṇa（覆物）と同じ意味になってしまって，不自然である。足利本の所伝で kāliṅgaprāvaraṇa

とのみあって，pratyāstaraṇa を省いているのは，この不自然さに気づいたためかも知れない。しかし，これは Pāli の paccattharaṇa に対同するもので，もとは Oxford 本や大谷本あるいは Bir 本 (35 b 3) 京大本 (62 a 2) にあるように存在したものと考えられる。

このように見てくると，*Sukh* の文は Pāli 文の転訛と考えられるが，しかし北伝系統では *Sukh* の表現のほうが古くから一般的であったらしい。まず，*MPS* 36；326 には kāliṅgaprāvā[ra]-pratyāstaraṇaḥ とあって，*Sukh* とほぼ一致する (prāvāra＝prāvaraṇa)。また *MSV* I. 36.20 にも kāliṅgaprāvāra-mṛdusaṃsparśāni（カリンガ産の覆いのように柔かい感触のある）とあって，やはり類同している。さらに漢訳を見ると，『雑阿含経』264 経（『大正蔵』2 巻，68頁上）に「迦陵伽臥具」，『中阿含経』巻 11，巻 14，巻 34（『大正蔵』1 巻，469 頁中，516 頁中，646 頁上）に「加陵伽波恕羅波遮悉多（または哆）羅那」とあって，kāliṅga の所伝を支持する。なお，チベット訳では，*Sukh* の場合には ka-liṅ-ka (312.1) と音写しており，これは前記 *MPS* 327 のチベット訳でも同じであるから，やはり kāliṅga を訳したものと見られる。したがって，この語については，北伝では恐らく部派仏教の早い時代から南伝の Pāli とは異なった伝承もしくは読解をしてきていると考えられる。しからば *Sukh* の文はこの経典において始めて転訛したのではなく，すでに古くから北伝系に伝えられた慣用句を受けたものというべきであろう。

28) virajo vigatamalaṃ dharmeṣu dharmacakṣur viśuddhaṃ …… prāptam (*Sukh* 66.2-4＝W 154.1-2)

[Pāli] virajaṃ vītamalaṃ dhammacakkhuṃ udapādi (*Vin* I. 11；*DN* I. 110；*MN* I. 380；*SN* IV. 47；*AN* IV. 186, etc.)

これは，遠塵離垢の法眼すなわち阿毘達磨の説でいえば，預流果を得たことを表わす文である。Skt. 文と Pāli 文とは全同ではないが，つながりを持つことは明らかである。この Skt. 文は，大乗経典では

慣用化されて用いられている (e.g. *SP* 471.3-4; *LV* 36.10)。

29) anupādāyāsravebhyaś* cittāni vimuktāni (*Sukh* 66.4-5=W 154.2-3)

* 足利本の anutpādāyā° を Oxford 本，大谷本によって改める。

[Pāli] anupādāya āsavehi cittāni vimucciṃsu (*Vin* I. 14; *DN* II. 35; *MN* III. 20; *SN* II. 187; *AN* I. 240; *Sn* p.149, etc.)

これは「取著なくして諸漏より心が解脱した」ことを表わす cliché で，Pāli においてすでに固定していたもの。原始仏教において解脱を表わす型としては，最も古いものと考えられる。Skt. 仏典では，大小乗を通じてしばしば用いられている (*Divy* 655.4; *Mv* I. 329.19; III. 67.1; 337.4; 338.20; *SP* 179.17; *RP* 59.19; *KP* 138.2; 145.2)。

30) puṣkariṇyaḥ …… aṣṭāṅgopetavāriparipūrṇāḥ samatīrthikāḥ* kākapeyāḥ** (*Sm. Sukh* 196.14-17)

* 石山寺本及び他の悉曇本による。木村本も同じ。

** Oxford 本，石山寺本ともに kākapeyā とあるが，荻原本の修正にしたがう[48]。木村本も同じ。

[Pāli] pokkharaṇī …… pūrā (*or* puṇṇā) udakassa samatittikā kākapeyyā (*MN* III. 96; *SN* II. 134; V. 460; *AN* III. 28)

Sm. Sukh の文は，極楽の蓮池の描写の中に出てくる一節であるが，羅什訳では「八功徳水充満其中」とあり，玄奘訳にも「八功徳水弥満其中，何等名為八功徳水，……」とあって，細部では合しない。しかし，チベット訳 (344,3-4) には yan lag brgyad daṅ ldan paḥi chus yoṅs su gaṅ ba/rin po cheḥi padmas khebs pa/bya rog gis btuṅ du ruṅ bar kha da chad[49] du gyur pa（八つの特性をそなえた水が充満し，宝石の蓮華によって覆われ，烏が飲むに適するよう〔水が〕ふちまで一杯になっている）とあって，Skt. 文にかなり近く

なっており，また対応の Pāli 文が示すように，ほぼ同文が Pāli 聖典の処々に認められるから，恐らく *Sm. Sukh* の原初形態からあった文と思われる。Pāli 文は，上例の蓮池についてのほかに，さらに Gaṅgā とか Aciravatī のような河 (nadī) について述べられる場合 (*Vin* I. 230; *DN* II. 89; *MN* I. 435; *Ud* 90, これらの箇所では udakassa の語を欠く) 及び水瓶 (udakamaṇika) について述べられる場合 (*MN* III. 96; *AN* III. 27) とがあり，広く用いられている慣用句である。

ところで，ここで問題なのは，samatīrthikāḥ kākapeyāḥ / samatittikā kākapeyyā という語である。samatīrthikāḥ は Oxford 本によると，samatīrthakāḥ になっているが，石山寺本をはじめ，すべての悉曇本にはかかる形はない (『悉曇阿弥陀経』19 頁)。Pāli との対比からすれば，samatīrthika のほうが samatīrthaka よりは Pāli に近い。しかし，さらに言えば samatittika よりは，むしろその varia lectio である samatitthika のほうに一層近い。この形は主としてビルマ系の写本に見られるものであるが (*Vin* I. 230; IV. 190; Footnotes on *DN* I. 244; II. 89; *Ud* 90; *Vism* 170), Edgerton (*BHSD*) は samatīrthika に対比して，このほうを正しい形と見なし，samatittika は恐らくその corruption であると述べている。では，この samatīrthika / samatitthika の etymology はどうであるかといえば，これはインドにおいて古来霊場として重要視された tīrtha (bathing ghats) に関係を持つ語であり[50]，恐らくもとは河や池の tīrtha のあるところまで，すなわち水浴場の岸の階段の高さまで水が等しく水平になっていることを表わしたものと見られる。この語とともに用いられる kākapeya / kākapeyya もインド一般に知られている語で (*Kāśikā* 2. 1. 33; *Siddhānta K.* 696: kākapeyā nadī), 烏が岸辺にとまって飲めるほど水が一杯に溢れていることを表わしたものと見られるから，このような語源解釈とほぼ対応するものといってよい。*Sm. Sukh* の漢訳二本には相当語を欠いているが，*DN* I. 244 に相当する『長阿含経』

巻16「三明経」(『大正蔵』1巻，106頁上) に「其水平岸，鳥鳥得飲」とあるのは，このような解釈を支持するものであろう。

ただ注意すべきは，以上は *Sm. Sukh* の文に即して考察したのであって，これによって samatīrthika / samatitthika の語源解釈が解決されたというわけではない。とくに Pāli の語源については問題が多く残っている。というのは，まず Pāli では全体として見れば，samatitthika よりは samatittika の形のほうが多く用いられているし，またセイロン写本では常に samatittika を用いているから[51]，これを簡単に corruption と見ることはできない。また samatittika の用法を見ると，先の語源解釈では説明がつかぬ例が出てくる。すなわち，先にも触れたように，samatittikā kākapeyyā は，単に河や池の水ばかりでなく，水瓶の中の水が縁まで一杯になっている場合にも用いられている。もっとも，これは河や池の水の形容の拡大・転用であると見ることができようが，しかし，他方 samatittika は (kākapeyya と切り離して単独に用いられるのではあるが)，単に水に関してではなく，鉢の中に食物を縁まで一杯に入れる場合に用いられており (*Vin* IV. 190; *MN* II. 7; *Mil* 213)，またある場合には糞坑 (gūthakūpa) の充満した状態についても用いられている (*AN* III. 403)。これらは samatittika という語が，先の tīrtha の解釈を拡大・転用したものとは言い切れぬことを示している。これは，むしろ tittika < tṛptika (satisfaction) の関係を想定せしめるものであり，samatṛptika / samatittika (等しく充ちたりた) という語源解釈を可能にするのである[52]。

31) padmāni jātāni nīlāni nīlavarṇāni nīlanirbhāsāni nīlanidarśanāni, pītāni pītavarṇāni pītanirbhāsāni pītanidarśanāni, lohitāni lohitavarṇāni lohitanirbhāsāni lohitanidarśanāni, avadātāny avadātavarṇāny avadātanirbhāsāny avadātanidarśanāni, citrāṇi citravarṇāni citranirbhāsāni citranidarśanāni (*Sm. Sukh* 198.1–6)

[Pāli] rūpāni …… nīlāni nīlavaṇṇāni nīlanidassanāni nīlanibhā-

sāni …… pītāni pītavaṇṇāni pītanidassanāni pītanibhāsāni …… lohitakāni lohitakavaṇṇāni lohitakanidassanāni lohitakanibhāsāni …… odātāni odātavaṇṇāni odātanidassanāni odātanibhāsāni (*DN* II. 110–111; III. 260–261, 287; *MN* II. 13–14; *AN* I. 40–41; IV. 305–306, 349; V. 61–62)

Sm. Sukh の文は，極楽の蓮池の蓮華が青•黄•赤•白•種々な色を持つことを形容したものとしてよく知られている。これに対応する Pāli 文は「八勝処」(aṭṭha abhibhāyatanāni) の説明文に出てくるもので，現在その Skt. 断簡も回収されている[53]。Pāli 文を *Sukh* に対比してみると，citrāṇi …… citranidarśanāni に当たる句だけはない。漢訳では，羅什訳では単に「青色青光，黄色黄光，赤色赤光，白色白光」とあって，やはりこれに当たる句はない。しかし，チベット訳 (344. 13) には bkra ba / kha dog bkra ba ḥod bkra ba ḥbyuṅ ba / bkra ba lta bur ston pa（雑は，雑色，雑光を生じ，雑のごとくに見える）とあるから，Skt. 本と同じである（ただし，チベット訳ではこの前文に Skt. 本にはない金色も加えている）。玄奘訳に「四形四顕四光四影」とあるのもこの句に当たるものと考えられるが，しからば，これは citrāṇi を catvāri と誤伝もしくは誤読したものであろう。

32) tāsāṃ ca tālapaṅktīnāṃ teṣāṃ ca kiṅkiṇījālānāṃ vāteritānāṃ valgur manojñaḥ śabdo niścarati (*Sm. Sukh* 200.6–7)

[Pāli] (a) tāsaṃ …… tālapantīnaṃ vāteritānaṃ saddo ahosi vaggu ca rajanīyo ca kamanīyo ca madanīyo ca (*DN* II. 171)

(b) tesaṃ …… kiṅkiṇikajālānaṃ vāteritānaṃ saddo ahosi vaggu ca rajanīyo ca kamanīyo ca madanīyo ca (*DN* II. 183)

Sm. Sukh の文は，極楽において「ターラ樹の並木」と「鈴の網」が風に吹かれて妙音を出すという描写である。*Sukh* においても，極楽の樹 (vṛkṣa) について，これと同様な描写があるが (32.19–21＝W 72.20～74.1；cf. 47.25–26＝W 110.15–16)，いまは *Sm. Sukh* の文

によって示すと，上掲のごとく，これに対応する Pāli 文が見出される。(a) (b) ともに *DN 17 Mahāsudassana-s.* に見出されるものであるが，*MPS* 308, 328, 332 によると， saddo ahosi vaggu ca rajanīyo ca kamanīyo ca madanīyo ca とある部分は ayam evaṃrūpo manojñaḥ śabdo niścarati と復原されている。すなわち，*Sm. Sukh* の文と一層類似している。恐らく北伝系では，このような表現が多く用いられ (e.g. *Mv* I. 194.14)，それが *Sm. Sukh* に受けつがれたものであろう。

ところで，*Sm. Sukh* では，上掲の文に引続いて "tad yathāpi nāma Śāriputra koṭiśatasahasrāṅgikasya divyasya tūryasya cāryaiḥ saṃpravāditasya valgur manojñaḥ śabdo niścarati ……" (シャーリプトラよ，たとえば何百・何千・何千万種類から成る天上の楽器が，聖者たちによって合奏せられたときに，美わしく快い音が流れ出てくるように……) という文が出てくるが (同様な文は *Sukh* 34.18-20＝W 78.2-3 にもある)，Pāli でも同じように上掲の (a) (b) には，ともに引続いて "seyyathā pi Ānanda pañcaṅgikassa turiyassa suvinītassa suppaṭipatālitassa kusalehi samannāhatassa saddo hoti vaggu ca rajanīyo ca kamanīyo ca madanīyo ca ……" (アーナンダよ，たとえば五種類から成る楽器で，よく練られ，よく調整されたのが，名手たちによって合奏せられたときに，美わしく快い好ましい恍惚とする音が出るように……) という文が出てくる。両者を対比してみると，文章的にはそれほど類似してはいないけれども，趣意においては全く合致するものであることが明瞭であろう。

33) (A) idam avocad bhagavān āttamanā Ajito bodhisattvo mahāsattva āyuṣmāṃś cānandaḥ sā ca sarvāvatī parṣat sadevamānuṣyāsuragandharvaś* ca loko bhagavato bhāṣitam abhyanandan (*Sukh* 66.24～67.1＝W 156.5-7)

* Oxford 本では sadevamānuṣāsuragaruḍagandharvaś とある。

(B) idam avocad bhagavān āttamanā* āyuṣmāñ Śariputras** te

ca bhikṣavas te ca bodhisattvāḥ sadevamānuṣāsuragandharvaś ca loko bhagavato bhāṣitam abhyanandan (*Sm. Sukh* 210.1–3)

* 石山寺本による。

** 石山寺本では āyuṣmāṃś chāriputra(? °putras) とする。

[Pāli] idam avoca bhagavā. attamanā te bhikkhū bhagavato bhāsitaṃ abhinanduṃ (*DN* I. 46; *MN* I. 6; *SN* I. 157; *AN* I. 276; *Sn* p. 149, etc.)

これは，経末の文であって，*Sukh* (A) と *Sm. Sukh* (B) はほぼ同じ型を以て示されているが，その由来が原始経典にあることは，Pāli 文の示すごとくである。Pāli 文に対比すると，Skt. 文は，比丘たちばかりでなく，菩薩たちや「神々・人々・アスラ・ガンダルヴァたちを含む世界のものたち」が歓喜したことを記しており，Pāli より増広の跡を示しているが[54]，これは大乗経典一般に通ずる表現であり (e. g. *AsP* 529.9–10)，珍しいものではない。ところで，Skt. 文の読解には一つ問題がある。それは，āttamanā を bhagavān にかけて読むべきか，それとも会衆 (*Sukh* は Ajito 以下，*Sm. Sukh* は āyuṣmāñ Śāriputras 以下) にかけて読むべきかということである。これを Pāli 文について見ると，attamanā は nom. pl. m. であるから，bhagavā にはかからず，te bhikkhū にかかることは明白である（ゆえに PTS 版では常に bhagavā で切っている)。だから，attamano という単数形が用いられる場合でも，bhagavā にかけることがない。たとえば，"idam avoca bhagavā. attamano Kevaddho gahatiputto bhāsitaṃ abhinandi" (*DN* I. 223) というごとくである。

しかし，Skt. 文の場合は，このようにはいかない。āttamanā(ḥ) を Cl. Skt. で解するか，又は BHS で解するかによって読み方が異なってくるからである。すなわち，まずこれを Cl. Skt. で解すれば，nom. sg. m. の形となるから，Pāli とは異なって bhagavān にかけて読むことができる（同様に，*Sukh* の場合は Ajita に，*Sm. Sukh* の場合は Śāriputra にかけて読むことができるが，いまはとくに bha-

gavān にかけて読みうる点が注意される)。足利本で idam avocad Bhagavān āttamanā, Ajito …… と切っており，同じように *Sm. Sukh* (Oxford 本) でも …… āttamanāḥ / āyuṣmāñ …… と切っているのは，このような読み方をとっていることを示している（したがって，Max Müller の英訳，南条博士の邦訳はこれに従っている)。Haribhadra によると[55]，*AsP* の末文の āttamanās も直前の bhagavān にかけて読んでいるから，このような読み方は古くから支持を得ているものである。しかし，他方 āttamanā(ḥ) を BHS と見て，nom. pl. m. の形と解するならば，(*BHSG*, 16.23；*BHSD*, s. v. āttamana(s))，当然 bhagavān にはかからず，Pāli と同じように読まれる。そして，このような読み方にも，古くから支持がある。すなわち，*Sukh* 及び *Sm. Sukh* の漢訳諸本では āttamanā(ḥ) を bhagavān にかけて訳しているものはないし，チベット訳もこの点全く同じなのである。荻原博士の邦訳もこれに従い，とくに *Sm. Sukh* (Oxford 本) の切り方については「段落点を除くべし」と刪修されている。岩波文庫訳も，同じくこれに従っている。近代に出版された他の大乗経典を見ても，…… bhagavān / āttamanāḥ …… と切っている例も少なくない[56]。思うに，Pāli との対照から見れば，このように読むほうが原始経典以来の伝統を表わしたものといえよう。Skt. 仏典の中には，大小乗いずれにおいても，idam avocad bhagavān āttamanasas te …… という文を用いる例も見出されるが[57]，この場合 āttamanasas は Cl. Skt. で nom. pl. m. の形であるから bhagavān にかからぬことは明白である。これは Pāli で示される用法を受けているものであり，これが伝統的用法であったと考えられるのである[58]。

註　記

1) F. Max Müller and B. Nanjio, *Sukhāvatī-vyūha, Description of Sukhāvatī, the Land of Bliss* (Anecdota Oxoniensia, Aryan Series, Vol. I, Part II), Oxford, 1883, p. iii.

2) 拙稿「インドの浄土思想」(宇野精一・中村元・玉城康四郎編『講座東洋思

想』6所収，昭和42年，7–10頁)。〔附〕拙著『原始浄土思想の研究』222–258頁参照。

3) F. Edgerton, *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary* (New Haven, 1953), Vol. I: *Grammar*, p. xxv. この書では，*Sm. Sukh* は *Sukh* とは区別せず，それに含めて取扱われている。

4) Edgerton の *BHSG & D* に対しては，J. Nobel, C. Regamey, E. Waldschmidt, H. W. Bailey, J. Brough, V. Raghavan などにより種々な角度からの批判が為されている。

5) É. Lamotte, *L'Enseignement de Vimalakīrti*, Louvain, 1962, pp. 97 ff.; ditto, *La concentration de la marche héroïque* (*MCB*, XIII), Bruxelles, 1965, pp. 303–304.

6) N. Dutt, *Saddharmapuṇḍarīkasūtram* (Bid. Ind.), Calcutta, 1952, pp. xvii–xix.

7) *Sukhāvatīvyūha*, édité par A. Ashikaga, Kyoto, 1965.

8)『梵蔵和英合璧浄土三部経』(昭和6年，再版，大東出版社，昭和36年)。なお，Oxford 本とは前註1)を指す。

9) 大谷光瑞『梵語原本国訳・無量光如来安楽荘厳経』(光寿会，昭和4年)。

10) これらの写本のうち京大本は足利惇氏博士・大地原豊助教授の御厚意により，また Bib. 本，Cal. 本は今西順吉助教授の御世話によって写真版を得ることができた。Bir 本は1962年に筆者がカトマンドゥを訪れた際入手した手写本であって，写真版ではない。なお，Bir 本の Cat. は，"Buddhist Manuscripts of the Bir Library" by Sanskrit Seminar of Taisho University, *Memoirs of Taisho University*, No. 40, 1955 により，東大本のそれは，S. Matsunami, *A Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Tokyo University Library*, Tokyo, 1965 による。〔附〕拙著，13–17頁参照。

11) 前註8)に同じ。

12) 足利惇氏「石山寺所蔵阿弥陀経梵本について」(『印度学仏教学研究』第3巻第2号，昭和30年，横組10–17頁)。

13) 法護(述)諦濡・典寿(校)『梵文阿弥陀経義釈』4冊(寛政7年)；阿満得寿編『悉曇阿弥陀経』(明治41年)。〔附〕拙著，97–98頁参照。

14) H. Kimura, *The Smaller Sukhāvatī-vyūha*, Part, I. Kyoto, 1943.

15) Baron A. von Staël-Holstein, *A Commentary to the Kāçyapaparivarta*, Peking, 1933, pp. iv, xii–xiv.

16) J. Brough, "Thus Have I Heard……," *BSOAS*, XIII (Pt. 2, 1950), pp. 416–426.

17) E. Conze も "Thus have I heard at one time" と訳している。ただし，その理由を記してはいない。e.g. *Buddhist Wisdom Books*, London, 1958,

p. 21; *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā* (Bib. Ind.), Calcutta, 1958, p. 1.

18) 中村元『般若心経・金剛般若経』「解題」(岩波文庫，昭和35年)，182–183頁。

19) たとえば，*DN* の34経のうち，会衆（比丘僧伽）に言及する11経 (Nos. 1, 2, 3, 4, 5, 12, 13, 20, 23, 33, 34) は，No. 2 を除くほかは，すべて500人説をとる。

20) たとえば，『長阿含経』の30経のうち，第7，14，19の3経を除くほかは，すべて1250人説をとる。

21) 12000人説は，たとえば羅什訳『妙法蓮華経』(『大正蔵』9巻1頁下)〈『正法華経』は「千二百」，サンスクリット本も1200人。しかし，ペトロフスキー本は12000人，チベット訳も12000人〉，『方広大荘厳経』(『大正蔵』3巻，539頁上)，*LV* 1.5 などがあり，32000人説は，たとえば『首楞厳三昧経』(『大正蔵』15巻，629頁中）に見られる。

22) Bib. 本 (2a2)，東大本 No. 27 (2a3)，No. 393 (2a1)，No. 399 (1b6) には uttamadamasamathaprāpta とある。この samatha は śamatha と混用されたものか? *LV* 169.5 にも damasamatha の用例が見られる。

23) これと似た uttamadamathaśamathapārami[tā]prāpta という合成語が *Mv* I. 237.11–12; III. 64.6 に見出される。

24) damaśamatha は，たとえば *SP* 80.9 に見出される。

25) 京大本 (1b7) には uttamadanasamathaprāpta とある。

26) e.g. *Sn* 725, 727; *DN* I. 156, 167, etc.

27) abhijñātābhijñaiḥ (Bib.本 2b4; Cal. 本 2a3; 東大本 No. 63, 3a1; No. 393, 3a2; No. 399, 2b1); cf. abhijñātābhijña[i]ḥ (Bir 本 2a5); abhi[jñā]-tābhijñaiḥ (東大本 No. 27, 3a1); abhijñ[āt?]ābhijñaiḥ (東大本 No. 43, 2b3).

28) 真田有美・清田寂雲「ペトロフスキー本 (Petrovskij MSS.) 法華経梵本の研究〈序偈より法師品まで〉」(『西域文化研究』第四「中央アジア古代語文献」所収，1961年，129頁）参照。

29) *Tib. Sukh* (『梵蔵和英合璧浄土三部経』所収) 220.1; 222.1. ただし *Sm. Sukh* のチベット訳には相当語を欠いている。

30) これを最初に指摘したのは泉芳璟氏である (『梵文無量寿経の研究』顕真学苑出版部，昭和14年，28–34頁)。

31) その思想的意義については，宮本正尊「空思想及びその発達」(『日本仏教学会年報』第17号，昭和26年，104頁）参照。

32) *Dbh* 20 (tad yathāpi nāma bhavanto jinaputrā jātarūpaṃ kuśalena karmāreṇa yathā yathāgnau prakṣipyate tathā tathā pariśuddhyati karmaṇyaṃ ca bhavati vibhūṣaṇālaṃkāravidhiṣu yathā kāmatayā).

33) Cal. 本には，この部分が脱落している。

34) これは泉氏（前註 30)）によって指摘され，のちに荻原博士も賛意を表わしておられる（『荻原雲来文集』昭和13年，885–886頁)。

35) 辻直四郎「書評：*Sukhāvatīvyūha*, édité par A. Ashikaga」(『鈴木学術財団研究年報』第 2 号，1965年，84頁）参照。

36) 詳しくは拙稿「阿弥陀仏の起源問題(二)」(『宗教研究』第 183 号，昭和40年，73–75頁）参照。〔附〕拙著，324–329頁参照。

37) 上掲の Vipassin についての Pāli 文 (b) には対応の Skt. 文があるが，それは Pāli 文と合致する (E. Waldschmidt, *Das Mahāvadānasūtra* (Teil II, 1956), S. 68–69：itaḥ sa ek(anavatitamaḥ ka)lp(o)…(vipaś)y(ī) samyaksaṃbuddho loka utpannaḥ)。しかし，後のAvadāna 文献になると "bhūtapūrvaṃ …'tīte 'dhvani ekanavate kalpe Vipaśyī nāma samyaksaṃbuddho loka udapādi…" というように，bhūtapūrvam ではじまる文に改められている (*Av.* 137. 7；349.3；352.12 etc.)。

38) その他については，赤沼智善『原始仏教之研究』(破塵閣書房，昭和14年) 554–555頁参照。

39) 拙稿「浄土教における行の中心問題——念仏の研究——」(『日本仏教学会年報』第30号，昭和40年，239頁）参照。〔附〕拙著，545–546頁，559頁参照。

40) *SP* では，さらに √arc（崇敬する）も加えて，計六語を並列する場合も多い (22.7；161.2；381.5)。

41) āpātha は *CPD* (s.v.) によると，ā＋caus. or class X of √path 'to make go, throw, send' に由来するものとせられる。しかし，V. Trenckner (*Mil* 428) によると，āpāta (cp. āpatati) の転訛と見られる。

42) 奈良康明「法華経における文体論的反覆 (Repetition) (II)」(『駒沢大学仏教学部研究紀要』第22号，昭和39年，4頁）参照。〈ただし，*SP* において hetu と pratyaya とが併用される例はある。〉

43) この場合，Pāli の hetu は Skt. の hetoḥ に当たる (W. Geiger, *Pāli Literatur und Sprache*, Strassburg, 1916, §22)。この hetoḥ は Pāṇini (2.3.26) によると genitive に解されるが，しかし近代の文法学者は ablative に解している (J. S. Speijer, *Sanskrit Syntax*, Leyden, 1886, pp. 138–139)。なお，Pāli の taṃ kissa hetu に当たる Skt. が tat kasmād dhetoḥ であらわされている場合もある (e.g. E. Waldschmidt, *Bruchstücke buddhistischer Sūtras aus dem zentralasiatischen Sanskritkanon*, Leipzig, 1932, S. 49)。

44) śraddadhādhvaṃ pattīyathāvakalpayatha（足利惇氏「石山寺所蔵阿弥陀経梵本について」〈前出〉(11頁)。

45) 拙稿「原始仏教における信の形態」(『北大文学部紀要』第 6 号，昭和32年，82頁以下）参照。〔附〕拙著，558–618頁参照。

46) ただし，E. Waldschmidt は *MPS* 326 における Skt. 文 (34.69) を *AN.* I

137; *DN* I. 7 に対比しているが，これはむしろ *DN* II. 182 に対比すべきである。

47) e.g. kadalīmṛgamokāni (*MBh.* 2. 45. 19)。

48) 飲光本・光覚本は kākāpeyaḥ, 常明本は kākapeyaḥ とする（『悉曇阿弥陀経』19頁）。

49) kha da chad は北京版に khad cad とあるのをデルゲ版によって改めた。ただし，この kha da chad も意味が明白ではないが『格西曲札蔵文辞典』(1957) p. 70 に "kha gaṅ ma gaṅ mñam pa / 平満，与口平満，満満的。(同) kha mtho dman mñam/" と解説しているので，いちおう「ふちまで一杯に」と試訳した。

50) 中村元『東西文化の交流』(『選集』第9巻，春秋社，昭和40年)，139頁，156頁参照。

51) セイロン文字では tt と tth の区別が明瞭であるのに対して，ビルマ文字では両者はよく似ており，混用され易い点に注意すべきである。

52) T. W. Rhys Davids, *Buddhist Suttas* (*SBE*, Vol. XI, 1881), pp. 178–179; 荻原雲来『梵漢対訳仏教辞典』(改版，山喜房仏書林，昭和34年) 註記 55 頁；泉芳璟，前掲書，83頁参照。

53) K. Mittal, *Dogmatische Begriffsreihen im älteren Buddhismus, I, Fragmente des Daśottarasūtra*, Berlin, 1957, S. 96–97; cf. *Mvy* 1522–1526.

54) しかし，Pāli 聖典では，他の箇所に "bhikkhū bhikkhuniyo upāsakā upāsikāyo devā manussā asurā nāgā gandhabbā" (*DN* III. 148) というような類似の表現が認められる。

55) U. Wogihara, *Abhisamayālaṃkārāloka Prajñāpāramitāvyākhyā*, Tokyo, 1932–35, p. 992. なお，ここで Haribhadra は āttamanās を Subhūti にもかけて註解しているが，いずれにしてもこれを nom. sg. m. と見ていることには変わりはない。ところが，荻原博士（『文集』883–884頁）は，この文脈に出てくる āttamanaso を nom. pl. と見て「弥勒等の大菩薩衆にかけ」て読み，Haribhadra が āttamanās を sg. pl. の両様に使っているように解しておられる。しかし，これは博士の感違いと思われる。この āttamanaso は次の語の bhagavato にかかる gen. sg. の形と見られるからである。

56) e.g. *Vaj* (ed. E. Conze) 62. 5–8; *Dbh* 99. 28–29; *Bhaiṣajyaguru* (in *Gilgit MSS.*, Vol. I) 32.2.

57) *Divy* 24.6; 55.14 etc.; *Av* 7.12; 12.20 etc.

58) いわゆる十八不共仏法の中の三念住の説から見ても，仏にはかかる歓喜はあり得ないはずである。宇井伯寿『大乗仏典の研究』(岩波書店，昭和38年)，80頁参照。

（昭和42年7月稿）

追　　記

本稿は，昭和42年7月に執筆したのであるが，印刷に附されるのが遅滞したので，その一部分は，拙著『原始浄土思想の研究』(岩波書店，昭和45年2月刊)，181–194頁，207–208頁に収めて公表した。しかし，それは，本稿であげた33項の中の 1)，3)，27)，30) の項について部分的に撮要したものであり，また *Sukh* のテキストについても，本稿では足利本を主としたのに対して，拙著では荻原改訂本を主としたという相違もあるから，本稿を改めて発表する意義は失われていないと思う。ただ，拙著においてすでに論及した問題については，註記にその旨を附記しておいたので，参照していただければ幸いである。

(昭和45年3月記)

Abbreviations of Sanskrit texts chiefly referred to:

AsP	*Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*, ed. R. Mitra, Calcutta, 1888.
Av	*Avadānaśataka*, ed. J. S. Speyer, St.-Pétersbourg, (1902–)1906–1909.
Bbh	*Bodhisattvabhūmi*, ed. U. Wogihara, Tokyo, 1930–1936.
Dbh	*Daśabhūmika-sūtra*, ed. J. Rahder, Louvain, 1926.
Divy	*Divyāvadāna*, ed. E. B. Cowell and R. A. Neil, Cambridge, 1886.
Gv	*Gaṇḍavyūha*, ed. D. T. Suzuki and H. Idzumi, Kyoto, 1934–1936, new revised ed. 1949.
KP	*Kāśyapaparivarta*, ed. Baron A. von Staël-Holstein, Shanghai, 1926.
Laṅk	*Laṅkāvatāra-sūtra*, ed. B. Nanjio, Kyoto, 1923.
LV	*Lalitavistara*, ed. S. Lefmann, Halle a. S., 1902–1908.
MPS	*Mahāparinirvāṇa-sūtra*, ed. E. Waldschmidt, Berlin, 1950–1951.
MSV	*Mūla-sarvāstivāda-vinaya*, ed. N. Dutt, Srinagar-Kashmir, 1942–1950.
Mv	*Mahāvastu*, ed. É. Senart, Paris, 1882–1897.
Mvy	*Mahāvyutpatti*, ed. R. Sakaki, Kyoto, 1916.
RP	*Rāṣṭrapālaparipṛcchā*, ed. L. Finot, St.-Pétersbourg, 1901.
Śikṣ	*Śikṣāsamuccaya*, ed. C. Bendall, St.-Pétersbourg, 1897–1902.
SP	*Saddharmapuṇḍarīka*, ed. H. Kern and B. Nanjio, St.-Pétersbourg, 1908–1912.
Suv	*Suvarṇabhāsottama-sūtra*, ed. J. Nobel, Leipzig, 1937.
Vaj	*Vajracchedikā Prajñāpāramitā*, ed. E. Conze, Roma, 1957.